

資料

# 長野県看護大学看護学部卒業生の動向調査 ——1 期生（1998 年度卒業）から 16 期生（2013 年度卒業）までの調査

竹内幸江<sup>1)</sup>，安田貴恵子<sup>1)</sup>，有賀美恵子<sup>1)</sup>，酒井久美子<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 長野県看護大学

長野県看護大学

第19巻別刷

2017年3月

## 長野県看護大学看護学部卒業生の動向調査 ——1期生（1998年度卒業）から16期生（2013年度卒業）までの調査

竹内幸江<sup>1)</sup>，安田貴恵子<sup>1)</sup>，有賀美恵子<sup>1)</sup>，酒井久美子<sup>1)</sup>

【要 旨】長野県看護大学看護学部卒業生817名を対象に，卒業生の動向を把握し，今後の卒業生支援に関する示唆を得ることを目的に質問紙調査を行った．回答数は305名（回収率37.3%）で，そのうち有効回答数は302名であった．89.4%が就業しており，看護師51.9%，助産師10.7%，保健師30.4%であった．卒後年数があがるにつれて保健師への職種変更が多くなっていた．転職・退職の経験者は56.6%であり，その理由として「結婚，出産」が最も多かった．進学した者は11.6%，資格取得者は22.5%であり，現在，進学意思のある者は7.6%，資格取得意思のある者は11.9%であった．キャリアアップ時に大学に望むことで多かった意見には「進学や資格取得の相談窓口」「興味ある講義の受講」「研究指導」「図書館の利用配慮」などがあった．卒業生に対する卒後支援として，キャリア形成を支援する窓口の設置や卒業生ネットワークの構築を視野に入れた情報交換などの必要性が示唆された．

【キーワード】卒業生動向調査，看護大学生，キャリア形成支援

### はじめに

長野県看護大学は平成27年に創立20年を迎え，これまでに1500余名の学部卒業生を輩出している．本学卒業生は，看護師，保健師，そして一部の卒業生は助産師の国家資格が取得できるので，それぞれの職種で活躍していると思われる．しかし昨今，新卒看護師の早期離職や看護師のメンタルヘルスなどが問題としてあげられている．このような状況にあって，今後，大学として卒業生にどのような支援が提供できるかを考えることが課題になると思われる．本学では，卒業時に就職予定施設・機関や職場選択理由の把握をしているが，卒業後の動向までは把握していない．そこで，教育機関としての社会的役割をどのように果たしているのかを評価する資料を得るためにも，卒業生の

就業実態や卒業後のニーズを調べる必要があると考えた．また，この調査により得られる結果は，設置者である長野県や関係機関に対する説明資料になると考える．

### 研究目的

本学卒業生の動向を把握することによって，卒業生の傾向や特徴を見出し，今後のキャリア形成支援に関する示唆を得る．

### 研究方法

#### 1. 調査対象者

長野県看護大学看護学部を1998年度（1期生）から2013年度（16期生）までに卒業した1377名のう

<sup>1)</sup> 長野県看護大学  
2016年 9月27日受付  
2017年 3月 9日受理

ち、長野県看護大学同窓会から、その規約に基づき開示される情報（卒業年度、氏名、連絡先住所）を得ることのできた817名。

## 2. 調査方法および調査内容

自記式質問紙を作成し、郵送法による配布と回収を行った。

調査内容は、①現在の就業状況（職種、勤務地、勤務年数、選択理由等）、②大学を卒業してからの就業状況（転職・退職の経験、卒業時の就職先の決定理由等）、③卒業後のキャリアアップの状況（進学の有無、学会の所属状況、自己研鑽していること、今後の進学希望等）、④大学教育の評価・要望（長野県看護大学の教育でよかったこと、学生生活でよかったこと等）、⑤回答者の属性である。

## 3. 調査機関

平成27年12月～平成28年1月

## 4. 分析方法

選択式の質問項目は単純集計した。集計結果を概観し、その前後で傾向に特徴がみられた卒業後10年を区切りとすることとし、卒業後10年未満と10年以上

についてカイ二乗検定を行った。自由記述は同じ意味内容のものをまとめカテゴリー化した。

## 5. 倫理的配慮

質問紙は無記名で個人が特定されないようにした。調査の趣旨・目的、協力は任意であること、結果の公表方法を記載した依頼文を質問紙に同封し、質問紙への回答をもって協力の意思を確認した。本調査は、長野県看護大学倫理委員会の審査を受け、承認を得て行った（承認番号2015-20）。

## 結果

本学卒業生817名に質問紙を送付し、305名から回答が得られた（回収率37.3%）。そのうち有効回答が得られた302名を分析対象とした。性別は男性15名（5.0%）、女性287名（95.0%）であり、既婚者が194名（64.2%）、子どものいる卒業生が160名（53.0%）であった。

### 1. 就業状況（表1）

現在の就業状況は、産前産後休暇・育児休業中も含めて270名（89.4%）が就業していた。そのうち、正規雇用は239名（88.5%）であり、管理

表1. 卒業生の属性と就業状況

		n=302			
項目		n	(%)	卒後10年未満 n=179	卒後10年以上 n=123
既婚		194	(64.2)	88 (49.2)	106 (86.2)
子どもあり		160	(53.0)	68 (38.0)	92 (74.8)
就業	している	270	(89.4)	163 (91.1)	107 (87.0)
	していない	31	(10.3)	16 (8.9)	15 (12.2)
雇用形態	正規雇用	239	(88.5)	149 (84.1)	90 (91.4)
	非正規雇用	21	(7.8)	8 (4.9)	13 (12.1)
管理職 <sup>1)</sup>		17	(6.3)	3 (1.8)	14 (13.1)
職種	看護師	140	(51.9)	99 (60.7)	41 (38.3)
	助産師	29	(10.7)	20 (12.3)	9 (8.4)
	保健師	82	(30.4)	37 (22.7)	45 (42.1)
	養護教諭	2	(0.7)	1 (0.6)	1 (0.9)
	看護教員	10	(3.7)	2 (1.2)	8 (7.5)
勤務地	長野県内	165	(61.1)	111 (68.1)	54 (50.5)
	県内出身者	146	(85.4)	103 (84.4)	43 (87.8)
	県外出身者	19	(19.4)	8 (20.0)	11 (19.0)
職場の満足度	満足群	192	(71.1)	111 (68.1)	81 (75.7)
	不満足群	77	(28.5)	52 (31.9)	25 (23.4)
継続意思	辞めるつもり	33	(12.2)	26 (16.0)	7 (6.5)
	わからない	44	(16.3)	27 (16.6)	17 (15.9)

1) 教員の場合は講師以上

有意差 \* p<0.05 \*\*\*p<0.001

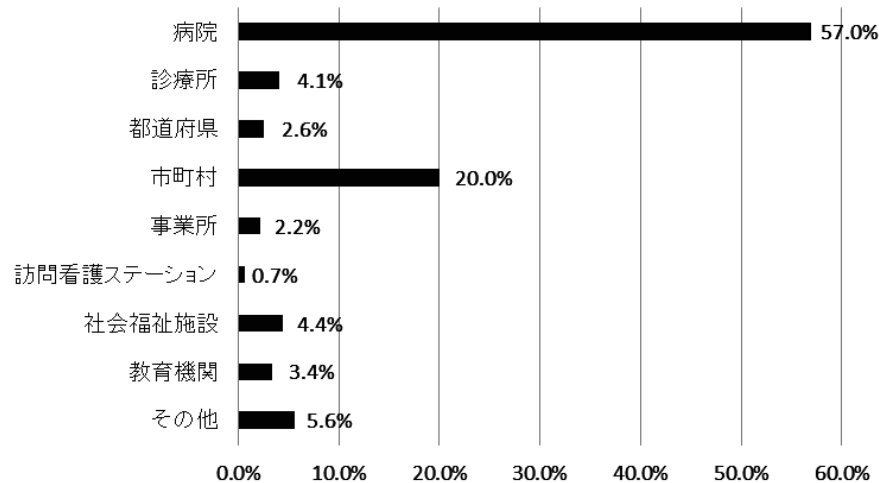


図 1. 勤務している施設・機関 (n=270)

職は17名 (6.3%) であった。職種の内訳は、看護師140名 (51.9%), 助産師29名 (10.7%), 保健師82名 (30.4%), 養護教諭2名 (0.7%), 看護教員10名 (3.7%) であった。勤務地は長野県内が165名 (61.1%) で、県内出身者171名中県内就業者は146名 (85.4%) であり、県外出身者98名中県内就業者は19名 (19.4%) であった。勤務している施設・機関は図1に示したとおり、病院が最も多く154名 (57.0%) であり、次いで市町村が54名 (20.0%) であった。勤務先の満足度は「満足」「やや満足」の満足群が192名 (71.1%), 「やや不満」「不満」の不満足群が77名 (28.5%) であった。「近いうちに辞めるつもり」は33名 (12.2%), 「わからない」が44名 (16.3%) であった。

## 2. 卒業後の進路 (表2)

転職・退職の経験は171名 (56.6%) がしており、1回が72名 (42.1%), 2回が45名 (26.3%), 3回が26名 (15.2%), 4回が18名 (10.5%), 5回が4名 (2.3%)

であった。卒後6年目で5回転職している者が2名いた。転職・退職の理由は図2に示すとおりであり、「結婚」が63件と最も多く、ついで「出産・育児」が42件、「地元に戻る」「他にやりたいことがあった」が39件であった。「その他」58件のうち「配偶者の転勤・転居」という回答が17件みられた。転職経験者171名の卒業時と現在の職場の選択理由を図3に示した。卒業時は「教育研修が充実している」が最も多く、次いで「地元である」「病院の規模や設備がよい」であったのに対して、現在の選択理由では「勤務時間」が最も多く、次いで「地元である」「福利厚生が充実している」であった。

表2に示したように、進学した者は35名 (11.6%) であり、看護系大学院が20名、看護系以外の大学院が6名、養護教諭養成課程が4名、助産学専攻科が3名などであった。卒後9年目までに看護系大学院への進学者はいなかったが、看護系以外の大学院への進学者が4名いた。

卒業後に取得した資格がある者は68名 (22.6%)

表 2. 卒業後の進路の状況

n=302

項目	n	(%)	卒後 10 年未満	卒後 10 年以上	有意差
転・退職経験あり	171	(56.6)	82 (45.8)	89 (72.4)	***
進学あり	35	(11.6)	11 (6.1)	24 (19.5)	***
資格取得あり	68	(22.5)	27 (15.1)	41 (33.3)	***
進学意思あり	23	(7.6)	14 (7.8)	9 (7.3)	
資格取得意思あり	36	(11.9)	22 (12.3)	14 (11.4)	

有意差 \* p&lt;0.05 \*\*p&lt;0.01 \*\*\*p&lt;0.001

で、ケアマネジャーが26名、認定看護師が8名、養護教諭一種が5名などであった。養護教諭一種の取得者は全員が卒後10年未満の者であった。

今後進学を考えている者は23名（7.6%）で、本学の大学院を志望しているのは7名であった。資格取得を考えている者は36名（11.9%）で、目指す資格はケ

アマネジャー、認定看護師、社会福祉士、各種のアドバイザー、各種のセラピストなど多岐にわたっていた。

### 3. 大学教育の評価および要望

“大学教育でよかったこと”に関する選択肢を示

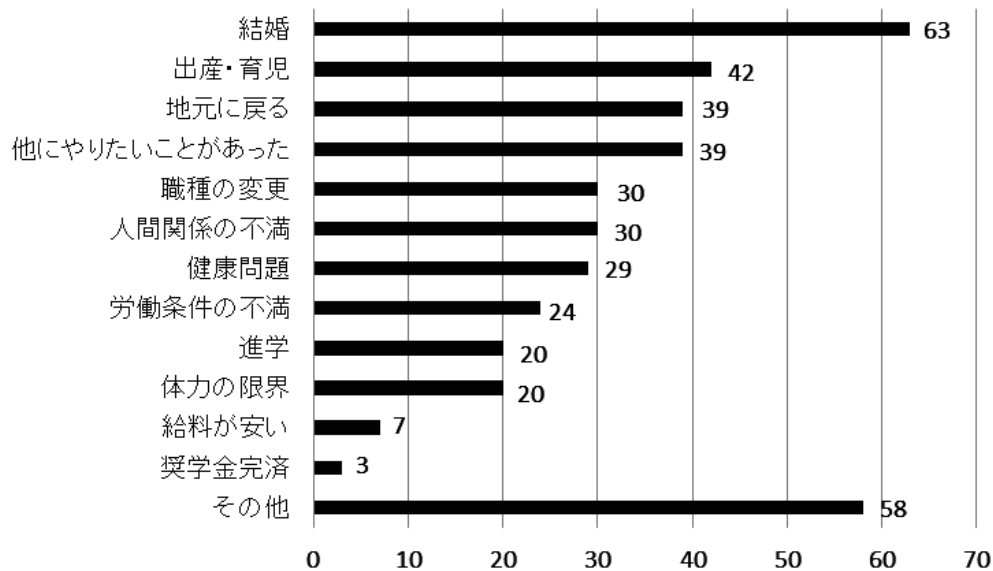


図 2. 転職・退職した理由

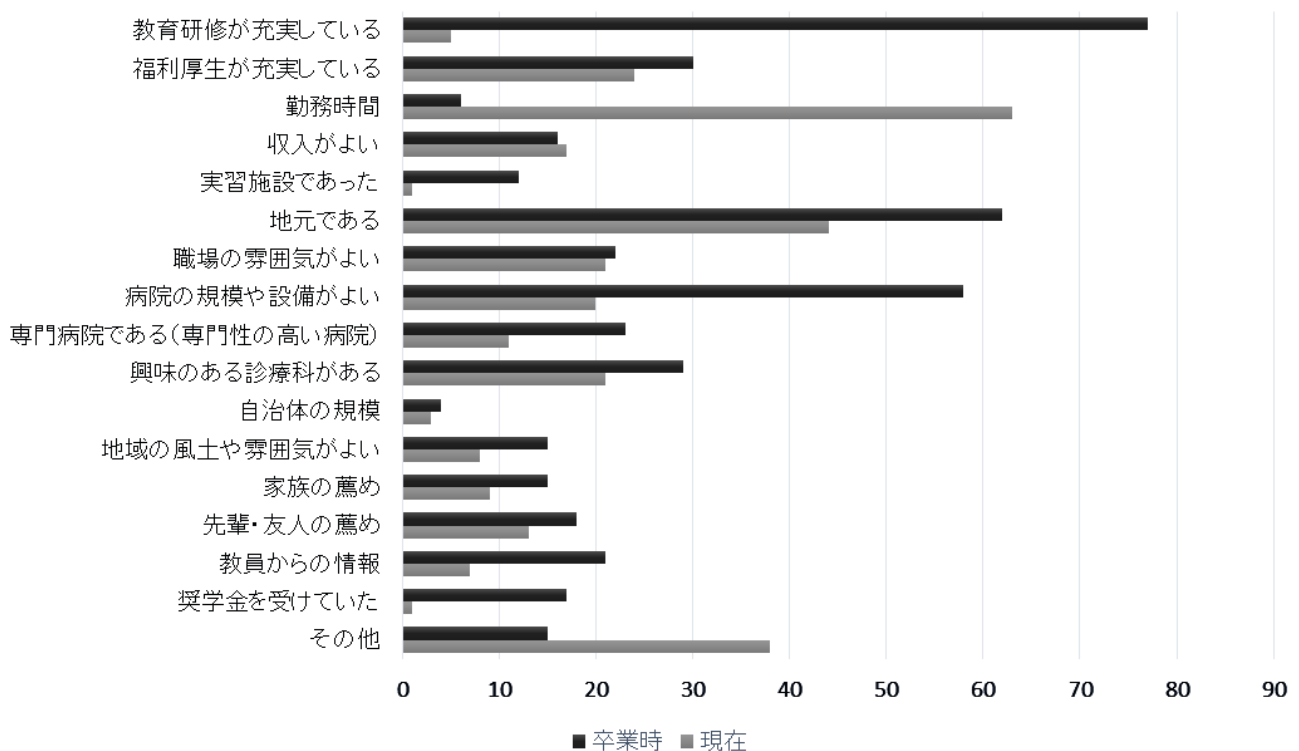


図 3. 卒業時と現在の職場選択理由（件数：n=71）

して聞いた結果（複数回答）、「講義の内容」が41.0%と最も多く、次いで「カリキュラムとその構成」が35.7%、「演習の内容」が25.2%であった（図4）。

“学生生活でよかったこと”に関する選択肢を示して聞いた結果（複数回答）、「大学の施設・設備」が62.3%と最も多く、次いで「同級生との交流」が60.0%、「大学周辺の環境」が47.9%であった（図5）。

“大学生活・教育で役に立ったこと”を自由記述で聞いたところ、最も多い内容は「臨地実習」が32件であった。次いで「看護研究」が12件、「友人との出会い・交流」が11件、「基礎的な知識・基礎的な考え

方」が9件であった（表3）。

表3. 大学生活・教育で役に立ったこと（自由記述）

カテゴリー名	記述件数
臨地実習	32
看護研究	12
友人との出会い・交流	11
基礎的な知識・基礎的な考え方	9
親元を離れた生活の自立	8
アルバイトなど社会経験	8
自己理解や他者理解に関する授業	7
地域看護学・地域看護実習	6
看護学以外の講義	6
教員から学べた経験や熱意	6

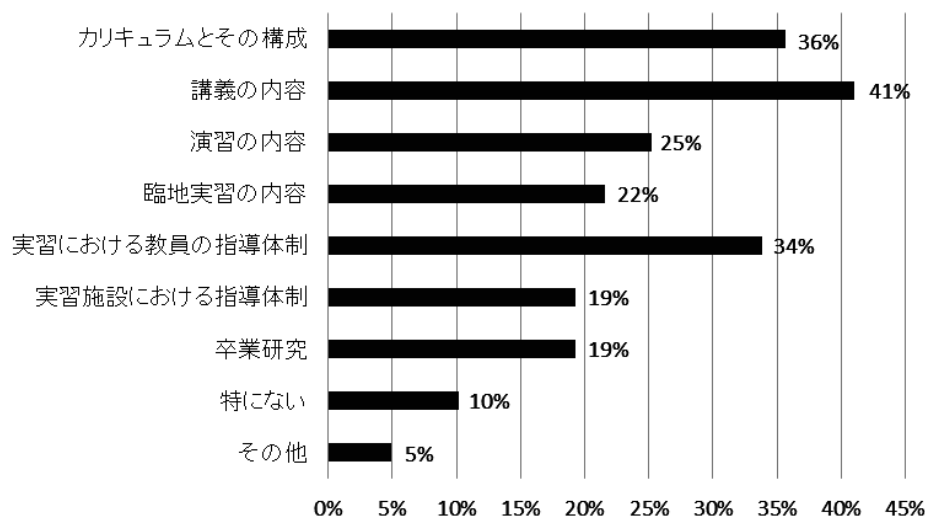


図4. 大学教育でよかったこと (n=302)

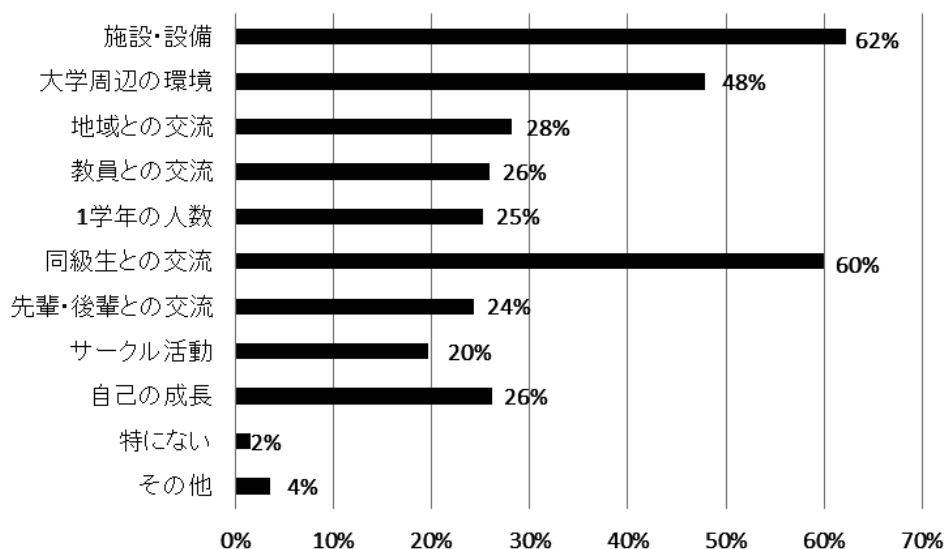


図5. 学生生活でよかったこと (n=302)



“あったらよかった実習内容”（自由記述）は、「成人看護実習での周手術期や内科など複数科の実習」が16件と最も多く、次いで「地域看護実習が短い、地区診断、保健指導」という地域看護実習に関するものが10件、「産業保健の実習」が8件であった（表4）。「訪問看護・在宅看護」という意見もみられたが、これは当時カリキュラムに在宅看護実習が独立した科目となっていない時代の卒業生からの要望であった。

表4. あったらよかった実習内容（自由記述）

カテゴリー名	記述件数
成人看護実習での複数科の実習	16
地域看護実習の充実	10
産業保健の実習	8
手術室・ICU・救命救急の実習	6
訪問看護・在宅看護	6
人体の解剖	6
複数を受け持つ実習	5

“大学でもっと学びたかったこと”（自由記述）は、「基礎看護技術」が12件と最も多く、次いで「統計学」「英語・英会話」が7件、「看護研究・プレゼンテーション」「医学や薬学の知識」「助産専攻であったが、専門学校生と比べて知識が浅いと感じた」が5件であった（表5）。これら件数の多い回答は、「看護研究・プレゼンテーション」のみ卒後10年以上の者が記載しており、それ以外は卒後年数に関係なく記載がみられた。

表5. 大学でもっと学びたかったこと

カテゴリー名	記述件数
基礎看護技術	12
統計学	7
英語・英会話	7
看護研究・プレゼンテーション	5
医学や薬学の知識	5
助産専攻科目の充実	5
地域看護学・実習	4
産業保健	4
臨床心理学	4

#### 4. 自己研鑽と卒業生への支援

看護系の学会に所属している者は57名（18.7%）であったが、研究発表の経験がある者は103名（33.8%）であった。定期的に専門雑誌を購読してい

る者は35名（11.5%）であった。“自己研鑽していること”（自由記述）として、最も多かった内容は「学会や院外の研修会に参加」の54件であり、次いで「勉強会や院内の研修会に参加」が25件、「資格取得」が9件、「専門雑誌を読む」が7件であった（表6）。

表6. 自己研鑽していること

カテゴリー名	記述件数
学会や院外の研修会に参加	54
勉強会や院内の研修会に参加	25
資格取得	9
専門雑誌を読む	7
新聞を読んで動向を知る	3
他部門や専門職との情報交換	3
特になし	8

“キャリアアップ時に大学から受けた支援”（自由記述）としては、「本学に限らずキャリアアップのための進学や資格取得の相談窓口」が13件と最も多く、他に「興味ある講義の受講」が3件、「研究指導」が2件、図書館の利用配慮」が2件などであった（表7）。

表7. キャリアアップ時に受けた支援

カテゴリー名	記述件数
進学や資格取得の相談窓口	13
興味ある講義の受講	3
大学院の情報提供	2
研究指導	2
図書館の利用配慮	2
給付型の奨学金	2
特になし	4

“卒後の支援として望むこと”に関する選択肢で聞いた結果（複数回答）は、「図書館利用の優遇」が最も多く35.7%であり、次いで「卒業生を対象とした研修会」が32.5%、「支援窓口の設置」が23.0%、「研究支援」が18.7%、「卒業生ネットワーク」が17.7%であった（図6）。

## 考察

### 1. 本学卒業生の特徴

卒業生の約9割が就業しており、他大学の調査結果（浜端ら，2013；井上ら，2005；南堀ら，2014；中野ら，2008；山形大学医学部看護学科厚生委員会，2010）と比較しても、ほぼ平均的な就業率と言える。本調査から、既婚率が64.2%で卒後10年以上に

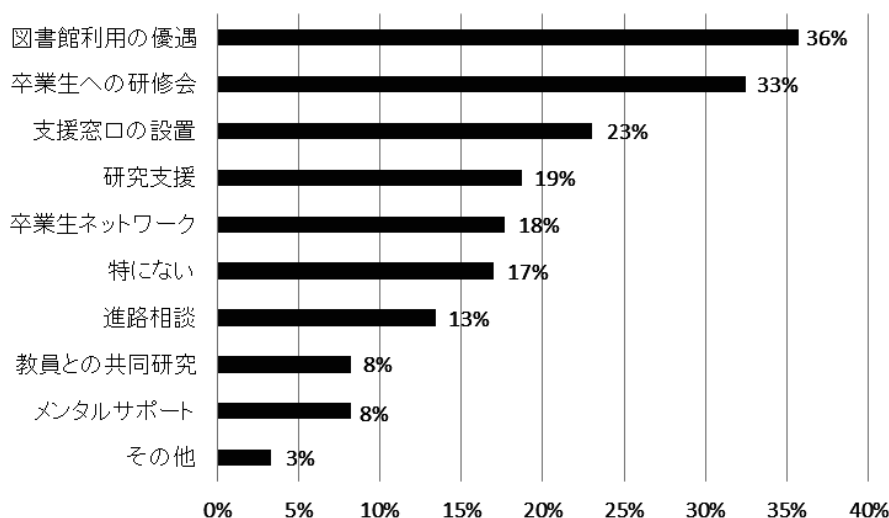


図 6. 卒後の支援として望むこと (n=302)

なると86.2%と有意に高くなり、子どもがある者も卒業10年以上では74.8%と有意に高くなるものの、卒業10年未満との就業率にそれほど差はなく、本学の卒業生は結婚、出産後も継続、あるいは復職して就業していることがわかった。

職種をみると、看護師は51.9%、保健師は30.4%であり、他大学（浜端ら，2013；日比野ら，2009；井上ら，2005；小池ら，2010；南堀ら，2014；中野ら，2008；山形大学医学部看護学科厚生委員会，2010）が、保健師5～26%という状況からみても、本学は保健師として就業している割合が高い。卒業時は看護師が70～80%、保健師が10～20%で就職していること、卒業10年以上の卒業生で保健師の割合が有意に高いことから、看護師として就職し何年か経ってから保健師に転職する者が多いと言える。看護師としての経験を活かして転職を考える場合もあると思われるが、結婚や出産後も働くことを考えると、夜勤や休日出勤の少ない職種として選択することがうかがわれる。勤務場所も病院が約6割と他大学（浜端ら，2013；南堀ら，2014；中野ら，2008）の72～75%と比較して少なく、反対に保健師として市町村に勤務する者が多かった。

勤務地をみると約6割が長野県内で就業しており、県内出身者の85.4%が県内で就業していた。卒業年数による差はなく、県内出身者はおおむね県内に留まる

傾向にあることがわかった。

転職・退職の経験は56.6%で卒業10年未満も45.8%であり、他大学（浜端ら，2013；日比野ら，2009；井上ら，2005；小池ら，2010；南堀ら，2014；中野ら，2008；山形大学医学部看護学科厚生委員会，2010）が13～45%の範囲にとどまっていることからみても、本学は転職・退職する割合がやや高いと言える。卒業10年以上では72.4%が経験しており、これは転職・退職の理由で上位を占めている結婚、出産が要因であることが、既婚率や子ども有率からも考えられる。また、地元に戻るという理由も上位にあがっており、県内出身者の県内就業率から推察すると、一度県外に就職して県内に戻るといった傾向がうかがわれる。図3に示したように、卒業時は「教育研修が充実している」「病院の規模や設備がよい」という選択理由が多く、職場教育への期待や、設備の整った大病院で働くことへの期待がうかがえるが、ある程度経験を積むと「勤務時間」「福利厚生が充実している」など、自分にとってより働きやすい職場へ転職する傾向にあることがわかった。

卒業後年数が長くなるほど進学者や資格取得者が多くなり、年数を重ねてキャリアアップしていることがわかる。ただ、卒業10年未満の進学先がほとんど看護系以外の大学院であり、今後取得したい資格も看護に限定されない社会福祉士やセラピスト、アドバイ



ザーが多かった。卒後間もない世代は看護に限定されていない資格にも興味をもっており、看護職としてのアイデンティティーが揺らいでいることが推察され、将来的に様々な可能性をさぐっていると考えられる。

進学や資格取得の意思については、卒後年数による差はみられなかった。進学意思は7.6%と少なく、今回の調査では希望しない理由を聞いていないが、家庭をもつことで融通がきかなくなることや、職場に身を置きながらキャリアアップを望む者が多いことが推測される。また、本学大学院への進学希望が少ないことは残念な結果であるが、本学に関する自由記述から「県外にいたので」「県内でも場所が遠い」など、地の利の悪さがうかがわれた。現在、大学院では遠隔授業の導入を行っているが、そのような工夫や配慮を充実させるとともに、キャリアアップの選択肢として大学院進学があることを、在学中から意識づけることも必要ではないかと思われる。

## 2. 本学に対する評価

“大学教育でよかったこと”としては、講義の内容、カリキュラムとその構成が評価されていたが、過半数を超えるものはなかった。実習における教員の指導体制については、本学は実習指導教員1名あたりの学生数が少なく、そのため目が届きやすいことが評価されたものと思われる。

“大学生活・教育で役に立ったこと”としては、臨地実習に関する記述が多く、実践の場において実習で学んだことが活かされていると考えられ、本学の実習内容も実践に役立つ内容であったことがうかがわれる。一方で、“大学でもっと学びたかったこと”として基礎看護技術に関する記述も多かった。看護技術は他大学の調査（南堀ら、2014；中野ら、2008）でも受けたかった教育の上位にあがっており、また職場でもっと受けたかった研修内容として上位にあがることも多く（南堀ら、2014；中野ら、2008）、学生個々の到達度と就職先で求められる能力が関係していると考えられるため、継続的な検討が必要であると思われる。“あったらよかった実習内容”では、地域看護の充実や産業保健に関する記述が多かったが、複合カリキュラムでの地域看護実習に限界があることや、転職

で保健師を考える者が多いことがその背景になっていると思われる。なお、成人看護学での複数科の実習に関しては、対象年度の卒業生が履修した成人看護実習では急性期か慢性期のどちらかの実習しか履修できなかったという事情があり、現在は複数科の実習が実施されている。

## 3. 卒業生への支援

卒業生は、学会や研究会などに参加して自己研鑽をしていることがわかった。卒後支援の希望では「図書館利用の優遇」が多く、自己学習の必要性を感じていることがうかがわれる。そのような卒業生に対して、支援希望の上位にもあるような「卒業生への研修会」を企画することも卒業生への支援の一助となると考えられる。その内容として、保健師への転職が多いことや実習への要望でもみられた地域看護や産業保健に関すること、もっと学びたかったこととしてあげられている統計学や看護研究に関することが考えられる。

また、キャリアアップに際しての進学や資格取得の相談窓口、および卒業生支援窓口の設置に対する要望も高かった。これは他大学の調査（山形大学医学部看護学科厚生委員会、2010；日比野ら、2009）でも同様の傾向にあり、大学としても卒業生のキャリア形成を支援する窓口等の設置が望まれる。卒業生のネットワークに関する要望もみられた。“学生生活でよかったこと”として「同級生の交流」が上位に上がり、“大学生活・教育で役に立ったこと”にも「友人との出会い・交流」があげられていたことから、学生時代のつながりを卒業後も継続できるような方法を考えていく必要がある。そのために、大学として卒業生同士が交流できるきっかけとなるような情報提供を行っていくことも一案と考える。

## 結論

本学卒業生の動向について、302名の調査結果から次のことが明らかになった。

1. 調査現在の就業率は89.4%であり、職種は看護師が51.9%、助産師が10.7%、保健師が30.4%であった。他大学の卒業生調査と比較して保健師の就業率が

高く、卒後年数があがるにつれて保健師への職種変更が多くなっていた。

2. 長野県内出身者の県内就業率は85.4%、県外出身者の県内就業率は19.4%であり、県内出身者は県内に留まる傾向にあった。

3. 転職・退職の経験者は56.6%であり、他大学の卒業生調査と比較してやや高かった。転職・退職の理由は「結婚、出産」が上位を占め、次いで「地元にもどる」「他にやりたいことがあった」の順であった。

4. 職場選択理由は、卒業時は「教育研修の充実」「地元」「病院の規模や設備」が上位であったが、現在の職場の選択理由は「勤務時間」「地元」「福利厚生者の充実」であった。

5. 進学した者は11.6%、資格取得者は22.5%であり、現在の進学意思ありは7.6%、資格取得意思ありは11.9%であった。キャリアアップ時に大学に望むことで多かった意見は「進学や資格取得の相談窓口」「興味ある講義の受講」「研究指導」「図書館の利用配慮」などであった。

6. 卒業後の支援として、キャリア形成を支援する窓口の設置や卒業生ネットワークの構築を視野に入れた情報交換などの必要性が示唆された。

### おわりに

本調査の回収率は37.3%であり、卒業年度により回答数もばらつきがみられたが、本学卒業生の動向を把握する初めての機会となり、得られた結果は今後の本学の教育のあり方や卒業生支援の手立てをさぐる基礎資料となったと思われる。

### 謝辞

本調査にご協力くださった卒業生のみなさま、ならびに調査実施にあたりご協力くださいました長野県看護大学同窓会役員の方々に感謝いたします。また、卒業時の資料提供と調査内容についてご助言くださいました、本学の元就職支援員の唐澤淳先生に感謝いたします。

### 文献

浜端賢次, 江角伸吾, 島田裕子, 他8名(2013). 自治医科

大学看護学部卒業生の現状調査－看護職を継続するための要因に着目した一考察－. 自治医科大学看護ジャーナル, 11, 65-73.

日比野直子, 野呂千鶴子, 山路由実子(2009). 看護大学における卒業生サポートネットワークの構築をめざした卒後動向の把握および支援ニーズに関する研究. 保健師ジャーナル, 65(8), 676-682.

井上仁美, 河野保子, 葉師神裕子, 他9名(2005). 看護系大卒者の動向と今後の課題 開学10年を迎えた愛媛大学医学部看護学科の卒後状況調査から. 看護教育, 46(7), 535-540.

小池秀子, 江守陽子, 三木明子, 他1名(2010). 看護学士課程修了後1年から3年の看護職の就業動向と職場定着状況. 日本看護学会論文集：看護管理, 41, 129-132.

南堀直之, 村井嘉子, 中道淳子, 他7名(2014). 石川県立看護大学看護学部卒業生の動向調査. 石川看護雑誌, 11, 51-62.

中野照代, 荒川靖子, 入江拓, 他10名(2008). 聖隷クリストファー大学看護学部卒業生の動向調査－職種別・卒業年3区分別比較－. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 16, 77-90.

山形大学医学部看護学科厚生委員会(2010). 看護系大学卒業生の職場定着および専門性獲得に関する意識調査. 看護展望, 35(12), 71-77.

【Materials】

## A survey on career progress of nursing graduates from Nagano College of Nursing in years 1998-2013

Sachie TAKEUCHI<sup>1)</sup>, Kieko YASUDA<sup>1)</sup>,  
Mieko ARUGA<sup>1)</sup>, Kumiko SAKAI<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>Nagano College of Nursing

【Abstract】 This study was designed to elucidate the career progress of graduates, and to obtain insights related to future support for graduates. A questionnaire was distributed 817 graduates of Nagano College of Nursing Faculty of Nursing. The response rate was 37.3% (n=305), and among them effective responses were 302. Among these responses, 89.4% were employed, with 51.9% working as nurses, 10.7% working as midwives, 30.4% working as public health nurses. As the number of years after graduation is longer, it has become many job changes to the public health nurse. Experience of retirement and job change is 56.6%, marriage and giving birth were the main reason for the retirement and job change. Person who went on to graduate school was 11.6%, and the person who took the qualification was 22.5%. When career, wishing to college were “Consultation for career up”, “Auditing an interesting lecture” and “Favor the use of the library”. Based on these results, it suggested to place a place to consult in the college and to exchange information putting to make a network for graduates in the field of view.

【Keywords】 survey on career progress, nursing college students, career development support

---

竹内幸江  
〒399-4117  
長野県駒ヶ根市赤穂1694番地  
長野県看護大学  
Tel: 0265-81-5185 Fax: 0265-81-5185  
E-mail: sachie@nagano-nurs.ac.jp  
Sachie TAKEUCHI  
Nagano College of Nursing  
1694 Akaho, Komagane, Nagano, 399-4117 JAPAN  
TEL: +81-265-81-5185 FAX: +81-265-81-5185  
E-mail: sachie@nagano-nurs.ac.jp